

三愛 ビュー view

発行所：三船病院相談室
 創刊日：2003年8月15日
 〒763-0073
 香川県丸亀市柞原町366
 Tel 0877-23-2341
 Fax 0877-23-2344



「デイナイトケアきたの紹介」

デイケア課 課長 國宗 聖子

平成26年4月、病院全体で取り組んできたダウンサイジングに伴う退院支援により更に約20名の方がグループホーム레이크ビューに退院し地域での生活を始められました。この方々がスムーズに地域生活に馴染んでいただけるようデイナイトケアの定員を50人に増やし、(現在デイケア50人、デイナイトケア50人で認可)建物を改装。スタッフも7名から11名(現在看護師3名 作業療法士4名 精神保健福祉士4名)に増員し「デイナイトケアきた」を開始いたしました。

一昨年の秋頃より退院支援活動として医療相談室が行っていた退院前のグループワークに入らせてもらうなどしながら、実際に退院しデイナイトケアを利用される方々にどのような環境や活動が必要か、多職種スタッフ全員で検討しながら準備を行いました。今回退院された方々の特徴として長期入院のため、社会・地域での生活経験が少なく、ストレス耐性が低く精神症状に起因する問題や課題も大きなものを抱える方の割合が多いということが挙げられます。このような利用者にとって既存のデイケア、デイナイトケアの施設で大人数のメンバーと一緒に活動していくには多大なストレスを生じ多くのトラブルや問題が発生することが予測されました。新たなデイナイトケアのメンバーが安心、安全に病状悪化せず地域での生活を維持していけるよう、少人数でじっくりと密にスタッフに関われるよう既存の施設とは切り離し別棟のスペースで活動を行うこととしました。それまで作業療法で使われていたスペースを快適に過ごしていただけるようできるだけ工夫を施しながら改装、新しい家具や備品なども用意し、平成26年4月10日から新デイナイトケアきたをスタートさせました。

活動もグループワークで学習、経験し培ってきたものを引き継ぎ発展させながら、新たな利用者の方々に合ったもの、まずは地域での生活を送る上で必要なスキルや情報を得る為のものや集団で活動することにより対人スキルを養うもの、充実した日々を過ごせるよう余暇活動的なプログラムなどを用意しました。近隣の土地勘を得る為に、利用できる店舗や施設へ実際に歩いてみるという街角探検隊や、整容・健康管理プログラムの他、デイナイトケアきた特有の活

動として朝食プログラムがあります。これはご自分では朝食を摂ることが困難な方がきちんと朝食を摂り健康的で規則正しい生活を送れるようサポートする為のプログラムです。簡単で安価な朝食ですが、「できることは自分達で行う」ことをモットーに毎日6~8名の方が参加されています。今はまだ皆さんの要望を伺いながらメニューと材料はスタッフが用意していますが、いずれは個々で朝食をきちんと摂れるようになることを目指していきたいと思っています。

プログラムだけでなく個別支援(生活相談・服薬サポート・身体管理)も個々のケース担当が中心となって手厚く行っているのもデイナイトケアきたの特徴です。またデイナイトケアきたではこれまで以上に多職種(看護師・作業療法士・精神保健福祉士)が各々の専門性を発揮しながらプログラムの運営に携わっています。利用者個々の安定した生活と病状を支える為にはスタッフ間での連絡、報告、協働は勿論ですが主治医やグループホームスタッフとの密な連携も不可欠です。

利用者の方もスタッフも暗中模索の状態で現在9ヶ月を経過しました。この間色々なことがあり、日々奮闘しながらもデイナイトケアきたが双方にとって定着しつつあるように思います。やはりすぐには馴染めず病状悪化し入院された方もいましたが、短期間で레이크ビューへ退院しデイナイトケアの利用を再開されています。また、当初はしたいことが表現できない人が大半でしたが、今ではどんなプログラムをやりたいか次々と発言していただけるようになりなりました。面接では「退院して本当によかった。」という声を聞くこともできました。スタッフも何が起るか、どう対応していいかわからないと気を張っていましたが、個々の利用者に正面から真摯に向き合い寄り添うことで、肩の力を抜いて関わるができるようになってきました。微力ではありますがデイナイトケアきたの利用者の方々の生活や人生が少しでもより豊かになるよう、デイナイトケアきたのスペースで成長、発展していけたらと願っています。





「いかに生きるべきかヒントになる一冊」

心理室 課長 片山 泰生

「ころをはぐむ

アルコール依存症と自助グループのちから」

著 者:今道 裕之(いまみち ひろゆき)

発行所:株式会社 東峰書房

日本のアルコール医療、パイオニアの1人である今道先生は、大阪府内の精神保健福祉の地域ネットワーク作りで臨床医として加わり活躍された方です。本書は1988年に土佐出版社から全日本断酒連盟の小林哲夫氏との共著で出された『水仲間アルコール症回復への道程』がベースになっています。

第一部アルコール依存症とはどんな病気？

アルコール依存症とアルコール飲料の功罪が相互に連なって進行する特徴的な精神・身体依存の形成と様々な死と隣り合わせの合併症が項目毎に簡潔にまとめられています。

第二部 回復への指針—自助グループのちから
第三部へのプロローグ的な内容になっていて特に「否認」の構造と理解“の項では今道先生と入院中の患者さんとその妻の間で交された問答がライブ収録で載っていてアルコール依存症を知らない一般の

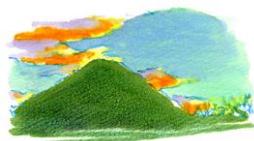
読者にもこの病気が一筋縄でいかない一端を知ることができます。

第三部 ころをはぐむ—病の背景を知る

科学技術の進歩の裏で現代文明が失ってきたものを考えるとき、自助グループの中で断酒している人たちを見ていると人間としての生き方を教えられます。と今道先生は綴っています。「生のよこび・躍動感」「絶対的基準として今日一日、酒を止めることの尊さ」等、自助グループを通して得た知見が散りばめられています。そして今道先生がこの本で伝えたかったのは「素直」「意欲」「感謝」「自己愛」「奉仕」の5つであると248頁にあります。遺作となった本書で今道先生からの未来へ向けてのメッセージだったのでしょか。

さらに今道先生は、精神科医 V・E・フランク(1905—1997)が提唱した「無意識的精神性にふれ、アルコール依存症から回復するために仲間たちと新しい人生を“想像”することを“実存”の本質に結び合わせていたようです。「心」と「精神」は分けて考える事がとても重要で“万人が共通してもつ普遍的な精神性”こそが私たちに最も大切なものであると記しています。

三船病院医師からのメッセージ…



「エキノコックス病」

三船病院 医師 野口 勝宏

今から10年ほど前、父が北海道に山登りに行くというので、私もついていったことがありました。地図では川沿いの登山道が、実際は沢をジャブジャブ上っていく道だったりして、ヘロヘロになって山小屋に着いたところ、水場に冷たくておいそうな水が。山小屋の方に確認したところ、「私たちは飲んでますよ」とのことだったので、つい飲んでしまいました。後悔先に立たず。私の後にも、「ええっ？ 飲んじゃったよ？」と叫ぶおじさんが。

エキノコックス症は、エキノコックスという名前の寄生虫が主に肝臓に寄生しておこる病気で、北海道では毎年10数名の患者が見つかるそうです。エキノコックス症は元々キツネや野ねずみの寄生虫で、キツネの糞と一緒に排泄された卵に汚染された沢水を飲むなどして人間に感染します。

人にエキノコックスが感染しても、すぐには自覚症状が現れず、数年から10数年の潜伏期を経て、上腹部の不快感や膨満感が現れ、したいに肝機能障害に伴うだるさや黄疸等の症状が現れます。放っておくと肺や脳に病巣が転移したり、命にかかわることもあるそうです。

生水は飲まないようにしましょうね。

三愛会 トピックス

★三船病院クリスマス会

12月24日に毎年恒例のクリスマス会を開催しました。ゲストでお招きした四国フォーク村の方の華やかな演奏でたいへん盛り上がりました。ケーキセットやフランクフルトなどのバザーも好評で、スタッフもトナカイやサンタの衣装を着て、会場全体でクリスマスの雰囲気を感じることができました。



★第34回相談室セミナー

1月15日(木)に第34回の相談室セミナーを開催しました。中讃保健所よりキャラバン隊をお招きして茶話会をひらき、退院後の生活の様子や大切にしていることについて、地域で暮らす当事者の方3名からお話を伺いました。お互いに元気をもらえる茶話会となり、また入院中の患者様に地域の風を運んでくださいました。



三船病院 委員会活動紹介

「衛生委員会」

副委員長 三浦 幸子

毎月第2水曜日に開催される衛生委員会は、職場における職員の安全と健康を確保するとともに、快適な職場環境の形成を図ることを目指しています。職員の方にはインフルエンザワクチン接種・B型肝炎ワクチン接種の促進、定期健康診断・特定業務従事者の健康診断の受診及び結果に伴い生活習慣の見直しについての指導を行っています。今年の冬は寒波の影響で気温の低い期間もあります。気温が低いと心配されるのが、インフルエンザウイルスやノロウイルスによる感染です。個人だけでしたら安静にしていれば回復するでしょうが、医療従事者は病院での感染防止に努めてもらうため必ず発熱や嘔

吐・下痢など症状があれば、病院への出勤する前に報告していただき、感染していないことを確認して業務についてもらっています。常に職員には自己の健康の保持及び増進に努力し、体調管理も大事な業務の一つと考えてもらっています。

患者様により良い患者サービスを提供できるように、まず職員が健康で患者様に援助できる体制で臨んでいけるように今後も取り組んでまいります。



《委員会》

- ・教育委員会(第1水曜日)
- ・個人情報保護委員会(第1水曜日)
- ・情報システム委員会(第1水曜日)
- ・クニカルバス委員会(第1水曜日)
- ・地域生活支援委員会(第1水曜日)
- ・行動制限最小化委員会(第1金曜日)
- ・人権委員会(第1金曜日)
- ・医療安全管理委員会(第2水曜日)
- ・衛生委員会(第2水曜日)
- ・業務改善委員会(第2水曜日)
- ・診療録管理委員会(第2金曜日)
- ・薬事審議委員会(第1水曜日)
- ・院内感染対策委員会(第3金曜日)
- ・栄養管理委員会(第2水曜日)
- ・褥瘡予防対策委員会(第2水曜日)
- ・患者サービス向上委員会(第2水曜日)
- ・病院機能評価委員会(水曜日)
- ・倫理委員会(年1回)
- ・医療ガス安全管理委員会(年1回)
- ・予算管理委員会(年1回)
- ・接遇管理委員会(年2回)
- ・診療情報提供委員会(随時)



【介護老人保健施設 福寿荘】

「施設の中にも見える社会現象」

介護福祉士 山路 照代

介護保険制度が実施されて15年目に入ろうとする今、当施設を利用されている方にも、現在85歳以上の方が60%、その中で90歳を超えている方は36%と、社会で言われている後期高齢者の時代は、小さな施設の中でも、はっきりと表れている様に思います。前期高齢者では60～75歳で当施設の中でも14.6%を占めており、退職して間もなく介護を必要とする方も増加しています。

要介護状態でも、4・5の認定を受けている方は、46.7%と半数に達しようとしています。車椅子を利用している方も15年前は数えるばかりでしたが、今では逆転しています。それだけ介護を必要とする方が増加し、ケアの内容は多様化・複雑化しています。ひとり、ひとりのライフ・スタイルを大事にしたいと思う反面、集団生活の中で関わりたいが時間不足。しかし時間がないことを理由にして逃げてはいけないという葛藤と戦いながら業務を行っています。

このような現状を考えると、私達も例外ではなく、いかに元気で健康を維持し、人の手を借りずに生き生きとした人生を歩むことが、働き盛りの共通の目標であり、課題ではないかと思えます。介護の仕事をする者として、利用者の方の人生を心豊かに、幸せに過ごす手助けをする事が、大きな目標であり課題として、日々精進したいと思います。



【三愛会コミュニティケアセンター】

「三愛会共同生活支援事業所」

グループホーム管理者 大路 健

三愛会共同生活援助事業所は、平成18年10月1日より「清和荘」「五月荘」、平成20年3月1日に「五月荘Ⅱ」、平成22年7月1日に「レイクビュー」、平成24年5月1日に「やよい荘」、平成25年3月31日に「MMハウス」、平成26年4月1日に「レイクビュー2」「レイクビュー3」「花園荘(地域移行型のグループホームとして、利用期限3年以内に地域移行を目指すグループホーム)」「空床型短期入所事業」が開所し、定員は「清和荘」10名、「五月荘」4名、「五月荘Ⅱ」2名、「レイクビュー」30名、「やよい荘」8名、「MMハウス」3名、「レイクビュー2」10名、「レイクビュー3」10名、「花園荘」13名の90名定員のグループホームとして運営しています。

利用者は、日中主に就労、就労継続支援B型事業所、地域活動支援センター、病院デイケア・デイナイトケア等に参加しています。

支援の内容は、すべて個別支援計画に基づき、利用者一人ひとり内容の異なったものとなっています。日常生活上の支援(居室の掃除、食事、金銭管理支援、洗濯等身の回りの支援)が中心の方、日常生活面は自立されているが、長期入院や入退院を繰り返すことにより病状が不安定となった方への病状面や服薬管理面に重きを置いた支援が中心の方、生活面、病状面どちらの支援も必要な方など、一人ひとりに必要な支援を、利用者の了解の上、提供しています。

今後も、支援内容の充実、従事している職員の質の向上を図り、支援を必要とされている方の地域での利用資源として、運営していければと考えています。

《三船病院からのお知らせ》

【行事予定】

○三船病院家族会

今年も5月に開催予定です。

多くのご家族様のご来場をお待ちしています。

《編集後記》

寒い日が続いておりますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

今回の三愛 view では、1面では昨年4月から新たに開所したデイナイトケアきたでの取り組み、2面ではアルコール医療についてのパイオニアの1人である今道先生の著書をご紹介しました。当院では医療やスタッフの専門性がこれまで以上に多岐に渡る役割を求められていると実感しております。少しでも皆様のお力になれるよう業務に努めて参りたいと思います。(三船病院相談室 PSW)